日本スポーツ社会学会会報

第16号

Sport Sociology

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
事務局：九州大学　1997.2.20

M・チクセントミハイ著　今村浩明訳
フロー体験 喜びの現象学
四六判／三七八頁／二四二七円
幸福、喜び、楽しさ、最適経験といった現象学的課題の本質を、心理学をはじめ、社会学、文化人類学、比較行動学、情報論、進化論、宇宙論、意味論などを駆使し、原理的、総合的に解き明した意欲作

ジャネット・リーヴァー著　亀山佳明・西山けい子訳
サッカー狂の社会学
●ブラジルの社会とスポーツ
四六判／三二二頁／二二三三円
世界最大のスポーツ・スペクタクル・イベント、ワールドカップ（W杯）を四度にわたって制覇したブラジル。その強さは何に由来するのだろうか。この疑問に社会学という視点から応えようとした貴重な一冊

G・ウォルフォード著　竹内　洋・海部優子訳
パブリック・スクールの社会学
●英国エリート教育の内幕
A5判／三六〇頁／三七八六円
生徒、教師、舎監、寮母のそれぞれの生活世界に立ち入って、喜怒哀楽とサバイバル戦略を生き生きと描出。エスノグラフィとジェンダー論を分析技法にして結実した見事な社会学的ルポルタージュ

杉本厚夫編
スポーツファンの社会学
三月下旬刊行予定
スペクテイターとしての「スポーツファン」、メディアによって作り出される「スポーツファン」とは一体何なのか。「見るスポーツ」に焦点を当て、ファナティックにスポーツを愛する人々について考察した注目の書

杉本厚夫著　1893円
スポーツ文化の変容
●多様化と画一化の文化秩序　文化装置としてのスポーツが発信するメッセージを読み解いた労作

亀山佳明編　1631円
スポーツの社会学
プロ野球、マラソン、ゴルフ、相撲等を通して、新たな視点からスポーツの「意味」をさぐる

井上　俊編　1893円
現代文化を学ぶ人のために
「都市、消費、情報、国際化」という基本的視点のもとに、多彩なテーマを通して現代文化を解読

江刺正吾・小椋　博編　1893円
高校野球の社会学
●甲子園を読む　文化社会学的な視点から高校野球を考察し、甲子園「神話」の深層に迫る

竹内　洋・徳岡秀雄編　1893円
教育現象の社会学
さまざまな視角から近代教育の解明を試みたポスト・モダニティの教育社会学

磯部卓三・片桐雅隆編　1893円
フィクションとしての社会
●社会学の再構成　事実と虚構の境界が溶解する現代社会におけるリアリティの根拠とはなにか？

世界思想社　京都市左京区岩倉南桑原町56　☎075(721)6506〈消費税別〉

目次

《諸報告》・・1
1．研究委員会報告
2．事務局より

《研究通信》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
最近思うこと ースポーツと県民性についてー　谷口勇一（福岡大学）

《会員の出版物の紹介》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
"National Sports Policies An International Handbook"
「今日も行くがや体育教師 ー講座 愉快なきょういく学３」
「わし、教員だわ ー笑いと怒涛の学校社会学」

《海外学会通信》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
北米スポーツ社会学会(NASSS)第17回大会　清野正義（立命館大学）

《会員の動静》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

《編集後記》・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

諸報告

1． 研究委員会報告

1．第６回学会大会／国際シンポジウム事務局からのお知らせ

第６回大会／国際シンポジウム開催まであと１ヶ月ほどになって参りました。北米のメール・リストSport Socに今大会について掲載しましたところ、韓国、香港、オーストラリア、ノルウェー、等から問い合わせ、参加申し込みがありました。また、先に要綱に書きましたように、本国際シンポジウムは外務省後援となっていますが、さらに文部省、読売新聞大阪本社、京都新聞により御後援いただくこととなりました。活気ある大会になることを事務局一同願っております。また、世界思想社のご援助・ご協力により、本国際シンポジウムの成果は次年度公刊されることとなりました。本学会の発展のため慶賀すべきことと思い、ここにあわせてお知らせいたします。

なお事務局不慣れなため、会員のみなさまにご迷惑をおかけいたしております。第６会大会／国際シンポジウム成功のため、平にご容赦下さるよう紙面をお借りしてお詫びいたしたます。

さて、大会／国際シンポジウム事務局より幾つか追加情報がございます。宜しく御熟読下さい。

1）開催要綱にもお書きいたしましたが、今学会大会／国際シンポジウムは、会場等の都合上、**事前申し込み、および参加費の事前振り込み**を行っていただくことになっております。現在70名ほどの方が申し込まれていますが、まだお済みでない方は早急にお願いいたします。

詳しくは会報第15号掲載の要綱、および同封の申込書をご覧下さい。またお手元にない方は大会事務局までFaxまたはE-Mailにてご連絡下さい（電話は他連絡でふさがっていることが多いのでなるべくお避け下さい）。

2）また今大会は、観光シーズンということもあり宿泊場所を大会事務局にてある程度確保いたしております（３月26日、27日、一泊8,500円程度）。まだ若干の余裕がございますので、参加申し込みと同時にご希望される方はお申し込み下さい。確保数を超えましたところで締め切らせていただきますので、お早めにお申し込み下さい。

3）会報第15号開催要綱で、参加申し込み、参加費事前お振り込みの方のみプログラム、抄録集をお送りいたしますと掲載いたしましたが、今大会抄録集がA4で200頁を越えるものとなりますので、**大会当日御配布を行うとあらためさせていただきます。またプログラムにつきましては、お申し込みの方に発送させていただきます。**尚、抄録集のみご希望の方は郵送費、印刷実費ご負担いただきましたら（併せて3,000円ぐらいになる予定です）、３月以降お送りさせていただきます。印刷部数の問題がございますので、その旨２月中に大会事務局までFaxまたはE-Mailにてご連絡下さい。

4）大会主管校ダイヤルイン設置により、大会事務局番号が変更となります。ご連絡は次ページに示します番号までお願いいたします（非会員の方から学部事務所等に直接問い合わせの連絡がかかってきており、混乱を招いておりますのでお間違いなきようお願いいたします）。

〒603-77　京都市北区等持院北町56-1
立命館大学産業社会学部　山下高行研究室
Fax：075-466-3157　E-Mail：yama@kic.ritsumei.ac.jp

参加費・懇親会費郵便口座振込先
口座番号：01060-6-35002
加入者名：日本スポーツ社会学会第６回大会事務局

＊申し込みは、懇親会参加の有無、参加ワークショップ番号、連絡先をお忘れなく。

2．海外研究者から研究交流の呼びかけ

日本社会学会事務局経由で、ノルウェー、Lillehammer　CollegeのDag. Leonardsen氏（Senior Lecturer：助教授相当）より、日本の研究者との研究交流の申し込みが来ております。リレハンメル・オリンピックを題材に、巨大イベントが地域にどのような変容をもたらすのかを研究しており、長野オリンピックと比較研究を行いたいとの意向を持っております。国際シンポジウムの紹介を行ったところ、シンポジウムに参加、3月27日午前の一般報告セクションにて報告されます（The Adjustment of A Mega-Event to A Local Culture）。交流を切に望んでおり、日本社会学会、日本スポーツ社会学会に何度も問い合わせを行ってきております。研究交流をご希望の方は、渉外担当、立命館大学山下高行までご連絡下さい（Fax：075-466- 3157、E-Mail：yama@kic.ritsumei.ac.jp）。

以下に同氏のE-Mailによる手紙の一部を転載いたしました。

Thank you for your information about the JSSS conference in March.

The program looks very interesting, though maybe it is a bit more oriented towards sports than my own research. In order to specify my interests, let me give you some more information about the theoretical and empirical aspects of my own research on the Olympics. If you would know about Japanese sociologists who is working more into social impact assessment studies, I would be very grateful to be informed. My main question in my research project is: What happens to a (small) community (like Lillehammer, 23,000 inhabitants) when a modernization project like the Olympics is to be arranged? Before the construction work took place, the situation was described like having a development of twenty years within a time span of three or four years. How would the community of Lillehammer react to such a new situation?

My theoretical framework around this question is the classical issue of "community lost or freedom gained" (cfr. classical sociology from Durkheim, Weber, Simmel, up to Habermas. Unfortunately my acquaintance with Japanese sociology is scarce). My empirical study is addressing both quantitative (labor and housing market, crime etc.) and qualitative questions, but with a focus on the last aspect.

This means that I have used a phenomenological approach, asking how the local inhabitants of Lillehammer constructed their new every day life before, during and after the Games took place. My project is in other words about social change, modernization, and the confrontation between a local society/a local culture and a modernizational project like the Olympic Games. Within this framework I also write about the meeting between the Lillehammer Olympic Organizational Committee (LOOC) (representing the "modernity"), and the local population (representing "tradition"). At the community level I discuss how the Lillehammer community experienced a very strong symbolic construction during the 16 Olympic days.

In short, it is a kind of community impact analysis I am into, and if you know about people who are planning to do this kind of analysis in Nagano, I would very much appreciate to hear about it.

Do you think that any aspects of what I have presented here would be of interest to any of your work shops during your conference in sport sociology in March?

Thank you for answering my mail - I hope to hear form you again.

2．事務局より

1．事務局の運営について

会報第15号の理事会報告にもありますように、事務局庶務担当の山本は、本年２月より10カ月間「文部省在外研究員」として海外に出かけることとなりました。この間、会員の皆様からのE-mailによるお問い合わせには答えられない状況が生じることが考えられます。事務局宛のご連絡、お問い合わせには、以下の電話・ファックスをご利用下さい。

西村秀樹：092-583-7847（ファックス兼用）
吉田　毅：092-583-7856（ファックス兼用）

2．住所不明の会員について

下記の会員は住所が不明のため、事務局より郵便物の送付ができません。消息（所属機関住所や自宅住所）をご存じの方は、下記事務局担当者までお知らせ下さい。

井神　秀展、稲垣　聡、内海　佳子、項　建初、杉本　京美、伏見　勝利、
舩山　裕憲、夫　基源、堀田　傳喜、永澄　憲史（講読会員）

〒816　春日市春日公園6-1　九州大学健康科学センター
日本スポーツ社会学会事務局
担当者：吉田　毅　電話・ファックス：092-583-7856

研究通信

最近思うこと －スポーツと県民性について－

谷口勇一（福岡大学）

広島大学大学院時代の私と友人のT君は、専攻している学問領域がそれぞれ体育社会学と学校保健学ということで、お互いの学問の話しを深くする機会は少なかったが、専門にやってきたスポーツ種目がともに陸上競技であることと、お互い九州の高校から関東の大学に進学し、その後同じ大学院にきたいわゆる「外様」同士ということで妙に馬が合い、夜な夜な大学院生室でコーヒー、時にはビール片手（指導教官殿ごめんなさい）に雑談を決め込むことが多かった。その雑談でいつも話しが尽きなかった話題は、決まって陸上競技のこと。とはいってもはじめのうちこそ専門的なトレーニング理論やクラブにおける組織運営はいかにあるべきかといった堅い話しなのだが、そのうち、内容は徐々に軟化し、陸上競技に関するマニアックなエピソードをどれだけ知っているか、例えばカール・ルイスが使用していたシューズメーカーの変遷とその経緯の真相や高校時代活躍した某選手は卒業後の進路先でどうしているのか等をお互いが披露し合いながら悦に入っていくというのが常であった。

そんな折、T君が発したこんなエピソードからその日の雑談は始まった。以下は二人の会話をできる限り忠実に再現してみたい。T君「大学の時、陸上部の寮で共同生活してたんだけど、部の運営や練習メニューについて何人かで気ままに話し合うとき、〇〇県出身の奴と〇〇県出身の奴が同席したときにはなかなか話しがまとまらんちゃ。それはミーティングだけじゃなくて練習の時、何人かが一グループになってメニューをこなしていくんだけど、出身県の組み合わせによってはどうもギクシャクしてしまうと」。学生陸上界の強豪校で、全国から強者が集う千葉のＪ大学で4年間を過ごしたT君の言葉には含蓄さえある。それを受けて筆者、「ふむふむ、何となくそれわかるねえ」、T君「例えばね、俺福岡だろ、だからといって同じ九州の佐賀とか大分の奴とうまくいくかっていうとそうでもないったい。逆に東北出身の奴と妙に馬があったりしてね、あいつらいい奴やったああ」、筆者「県民性というか地域性の問題ってあるよね。俺、宮崎から群馬の大学に行って陸上したけど、地元の連中と練習に対する、いや陸上に対する考え方の違いをよく感じたなあ」、T君「例えば？」、筆者「うん、群馬の連中は東京がわりと近いでしょ、だから本物を見る機会が俺よりは多くて何となく普段の意識レベルも高いように感じるわけ。それに対して俺は田舎でやってきたから今一つ上昇志向が弱かったような気がする」、T君「ああ、意識の地域間格差ってやつはあるかもなあ。一応勝利志向が強かったウチの大学でもそんな感じはあったよ」、筆者「スポーツって共通のものだけど、それをやる環境や風土によって意識レベルは変わってくるよね、当たり前のことだけど。それぞれの県の県民性がスポーツへの意識形成にどう影響しているのか誰か調べてるのかなあ、それに地域ごとにスポーツ気質のタイプわけみたいなことできないかなあ」、T君「うん、どこどこの出身の奴には厳しく言ってもいいけど、どこどこの奴は煽てたほうがいいといったコーチ学が言えたらスペシャルに面白いね」、両人「ハハハハ」。

たわいもない雑談の一部始終で紙面を割いてしまったが、最近、大学院時代にT君と話したこの県民性とスポーツに関する話しが改めて気になり始めている。それというのも、私が現在勤務する福岡大学には体育学部があり、九州各県を中心に優秀なアスリートが集まってきているのだが、

日々、学生たちの素行や言動を注意深く観察してみると、どうもその出身県別にスポーツへの意識や取り組み方のスタイルに違いがあるように思えてならなくなったからである。それにその意識差も、それぞれの県の位置している地理的条件によって、いくつかの県同士がある共通の性質を有しているようにさえ思われてならない。では具体的に私自身が感じている我が体育学部生の出身県別の気質を九州地区に限定し述べてみたい。

まず大学のある福岡県人。一応は都会であり、古くからスポーツの盛んな土地柄でもあることから、その態度や意識は比較的スマート。各スポーツ種目において県内の激戦を勝ち抜いてきたというプライドとゆとりをその肢体から醸し出している観がある。次にその福岡県に隣接する佐賀県人はどうか。一言で表現すれば、福岡に対するコンプレックスの固まりである。それを克服しようとする意気込みが高じて頑固になり、偏屈ささえも見え隠れする。この傾向は、同じく隣接県である熊本県人、大分県人にもおおよそあてはまるような気がするが、こと熊本県人に関しては、佐賀県人以上に福岡に対しての対抗意識が強く、殊更に頑固なようだ。ちなみに多くの熊本県人は、福岡より熊本の方がハイセンスだと信じて疑っていない。ではさらに周縁に位置する長崎県人、宮崎県人、鹿児島県人、そして沖縄県人はと言うと、先述した福岡との隣接三県のようなコンプレックスは影を潜め、それぞれが独自の文化性みたいなものを築いているような観がある。まず長崎県人は、周りのペースに左右されないマイペースな雰囲気があるし、宮崎県人に至っては、地理的に隔離されていることもあってか、向上心が乏しい。しかしよく言えばおおらかさを持ち備えている。確かに私自身も宮崎県出身であるが、思い起こせば福岡をあまり強く意識することはなかったように思う。さらに鹿児島県人に至っては、完全に独自のアイデンティティを誇示し、熱き心で我が道を行っている。最後に沖縄県人。この県に関しては、これまでの九州各県のそれとはまったく趣を異にしているが、いずれにしても独自の文化性を持ち得ている。

以上が、私なりの九州各県のスポーツ人気質観である（「私なり」とは言っても、大学生時代に読んだ祖父江孝男氏の「県民性」（中公新書）という本の影響が多分にあることは否定できない）。そこで、この私なりの見解をもとに、九州地区における地域性とスポーツ人気質の構造を仮説的に捉えてみたい。まず九州地区において色々な意味でリーダー的存在であり、スポーツの盛んさでは全国有数の都市といえる福岡のスポーツ人を「高プライド保持層」として中心に置く。次に、その周縁には対福岡を過剰に意識する佐賀、熊本、大分が「コンプレックス形成層」として取り囲み、さらにそのまた周縁に長崎、宮崎、鹿児島、沖縄といった「独自アイデンティティ保持層」が位置するという、いわば「スポーツ人気質の三層構造」が成立すると思われる（それぞれのネーミングがどうもしっくりこないが・・・）。

まさにアバウトな仮説であるが、このスポーツ人気質の三層構造は他の地域でもあてはめられるところがありはしないか。例えば私自身が大学時代すごした群馬県。牧歌的でおおらかな人間性を醸し出しつつも、ことスポーツ人気質に関しては「コンプレックス形成層」であった気がする。コンプレックスの対象は、東京都、神奈川県、埼玉県といった首都圏。言うなれば、これら首都圏のスポーツ人気質は「高プライド保持層」といえよう。しかし同じく群馬との隣接県である長野県や新潟県は、首都圏へのコンプレックスは消え失せ、いわゆる「独自アイデンティティ保持層」といった観があった。そう考えると、関東近辺も九州地区同様、三層構造が成立するかもしれない。

では、大学院時代を過ごした広島県はどうだろうか。ここも福岡と同様に中国地区におけるリーダー的存在であり、スポーツ人気質としては「高プライド保持層」だろう。それに対して隣接する鳥取県、島根県は広島に対する「コンプレックス形成層」と言えなくもない。しかし東西に隣接する岡山県と山口県はそれほど広島に対してコンプレックスをもっていたという印象はない。中国地区は、山陽側の「高プライド保持層」と山陰側の「コンプレックス形成層」という二層構造なのだ

ろうか。
まったくの私自身の経験と主観のみで、「地域性とスポーツ人気質」に関する大胆な仮説を述べてきたが、将来このような地域（各都道府県）ごとのスポーツ人気質を科学的に体系化できたら面白いだろうなあと思っている。なぜなら、スポーツ人の行き来が頻繁になってきた現在、冒頭のT君との会話にもでてきた雑多なスポーツ集団（色々な土地の出身者が集まるという意味で）で生じる選手の出身県の組み合わせによる相性の善し悪しが説明できたり（これはまったくの個人的な関心事であるが）、またそのことがひいては指導者のクラブマネジメントの一つになり得るかもしれない。それに、この全国のスポーツ人気質を細かく検証していくことで、古くから各地に根付いている風土や文化性みたいなものを改めて把握していけたとすれば、このテーマは文化人類学的な研究としても可能性を秘めているのではないのかなどと考え、ワクワクしてしまう今日この頃である。SoSNet等でご意見いただければ幸いです。
（本文に出てまいりました都県関係者の方々には、勝手な県民性の解釈をいたしましたことに関してお詫び申し上げます）

会員の出版物の紹介

National Sports Policies An International Handbook

Edited by Laurence Chalip, Arthur Johnson, and Lisa Stachura

Greenwood Press. 1996. 456 pages. 0-313-28481-4.

This unique reference, comparing different policies and programs of amateur and professional sports around the world, fills a real gap in scholarly cross-national analysis. Covering fifteen countries, this handbook appraises the relationships of sports organizations with government, describes important sports activities and organizations, assesses policies and programs in historical context, and points to current issues and future prospects.

This comparative study provides a foundation for understanding policies through which sport is developed and administered and for viewing different political cultures. The reference describes varying degrees and kinds of government involvement in sports, illustrates how sports systems differ from country to country, points to various policy legitimations and implementations, and indicates how sports may be affected by economic resources or public health goals. Designed for students, scholars, sports professionals, and all concerned with public policy making.

CONTENTS:

- Introduction: Thinking about National Sports Policies by Laurence Chalip
- Australian Sports Policy by Peter J. Farmer and Steve Arnadaun
- The State versus Free Enterprise in Sport Policy: The Case of Brazil by Lamartine P. DaCosta
- Sport and Government in Canada by Donald Macintosh
- The People's Republic of China by Cao Xiangjun and Susan E. Brownell
- Communist Sports Policy: The End of an Era by Jim Riordan
- Sport in Cuba by Paula J.Pettavino and Geralyn M. Pye
- Sports in France by Alain Michel
- Sports Policy in Germany by Klaus Heinemann
- Sports Policy in Hungary by Gyongyi Szabo Foldesi
- National Sports Policy in India by P. Chelladurai, M. L. Kamlesh and Usha Sujit Nair
- The Governmental Sports Policies of the State of Israel by Uriel Smri, Gershon Tenenbaum, and Michael Bar-Eli
- Italian Sports: Between Government and Society by Nicola Porro

・Sports Policy in Japan by Yuji Nakamura
・Sports Policy in Norway by Berit Skirstad and Kristin Felde
・Sports Policy in Spain by Nuria Puig
・Sports in the United Kingdom by Barrie Houlihan
・Sports Policy in the United Stares by Laurence Chalip and Arthur Johnson
・Index

LAURENCE CHALIP is a Senior Lecturer with the Faculty of Business and Hotel Management at Griffith University's Gold Coast Campus in Queensland, Australia, where he directs the university's sport management program. He was a research associate with the International Anthropology Project at the Los Angeles Olympic Games and an executive member of the Seoul Organizing Committee for Olympic Cultural Performance and Research. He has held faculty positions at the University of Chicago, the University of Waikato, and the University of Maryland at College Park, where he remains and adjunct member of the graduate faculty.

ARTHUR JOHNSON is Professor of Political Science at the University of Maryland Baltimore County. He is the author of numerous articles on public policy and sports in the United States and Minor League Baseball and Local Economic Development(1993). He also is the coeditor (with James Frey) of Government and Sport: The Public Policy Issues(1958).

LISA STACHURA is a Governor's Policy Fellow in the States of Maryland, working with the Maryland Department of Housing and Community Development.

＃上記の書物は、中村祐司会員（宇都宮大学）よりご紹介いただきました。
詳しくは、以下の日本の代理店までお問い合わせください。

Yushodo Fantas Corporation
2nd Newfield Building
42-3, Ohtsuka 3-chome
Bunkyo-ku, Tokyo 112
Japan

「今日も行くがや体育教師 ―講座 愉快なきょういく学３」

岡崎　勝著
風媒社

＜もくじ＞

体育教師は不合理なんだわ
タイソーの先生はおそがいよ
「スポ根ドラマ」は美しいわね
運動会はおもしろいがや
給食は、子どものエサか？
彼女はデート壊
ニューハーフのかたがた
日の丸があれせん
組合選挙に立候補したんだわ
週案出すのはホモ関係か!?
教育実践はしんどいなも
疎外されてる人びと
今藤クン、まだ終わりやないでね
子どもは憎たらしいなも
決勝審判で寝てまったがや
岡崎先生にも責任はあるがね
ビラまきはおもしろいがや
「父母との連帯」はむなしいね
わしはアレルギーっ子の父だがね
体育教師、いつか市長の座を
得票数が減ってまったがね
アスク結成だがね！
指導主事には出がらしのお茶を
不倫が好きな大学のセンセ
体育主任会は″怪″会
教師はカラオケでもすぐわかる
日の丸・君が代がたまたま消えた
セコイ教頭はいじめないかん
教師はとにかくまじめだがや
体育教師過激派の人びと
通知表なんか適当でええがや
かげとひなたは誰でもあるがや
ヤクザさんもたいへんだわ
若いお母さんは大胆だがね
なんとも理解に苦しむ出来事
中学生もいろいろおるわね
やめられんのだよな、これが
体育教師の夏休み
子どもの眼が輝く授業
近頃「万引」事情
家族ってなんだゃあも
これがわしらのやり方だがね
どんぐりころころ、放っといて
アスクも教研をやるがね
「子どものため」はなんのため？
日の丸・君が代はどこへ行く
健康診断っていったいナニ？
体育科はすごいがね
体育教師の知られざる特技
真夏の夜の現実だがや
「職員運動」って楽しいなも
人間ドックに行ってきたがね
教師はこうして出世する
　　―大公開！　衝撃の内部告発
体育教師歳時記
あとがき

「わし、教員だわ ―笑いと怒涛の学校社会学」

岡崎　勝著
家族社

＜もくじ＞

はじめに

第一部　わし、教員だわ

ほったらかし
「家はしっかりしつけています」
　というわりにしっかりしていない子
卒業式って何だゃぁも
勉強のでっきん子
親もたいへんだわなあ
偏食の子
〃１〃の欲しい人おるきゃぁ
みんな悩んで教師だらけ！
お金は欲しいけどよぉ
パンツ見せてちょーだい
ついに日曜日も先生になってしまった
わしは良心派だがや
ぞうぎんを買ってきてちょうだい
「日の丸・君が代」って、なんでゃぁも
「子どものために」はむつかしい
植物生アレルギーは、大変だがね
わかりあえんのはつりゃぁなも
家庭訪問みたゃぁどっちでもええがや
身体測定のセクハラ
「別れ際のいい男」ってむつかしいがや
教師も親であるが、親のフリはむつかしい
暑いとな～にもやりたぁゃにゃぁ
暴風雨警報が出たぎゃぁ
「イラナイ、シラナイ、ソトイク」
体験論文指導は無償の愛
反戦授業も天皇制だとコワイがや
クラブ活動は楽しいがや
君が代と若いママ
心を育てるあさがお
つつましい〃生きがい〃
昼下がりの居眠り大会
学校プールの恐ろしい話
「指導要録」について文部省は反省文を書け
臨教審対決のさかあがり
わし、教師の鏡だわな
個人懇談はつかれるなも
スクーリング・ホラー
男の尺度で女を見ないで
いやしい奴は誰だ？
春だぞ、みんな眼をさませ
〃男の子育て〃を考えずにやる
わし、学童保育所の副会長だわ
給食の後は眠り教師労
休むことは美徳だわ
学校五日制
抗議は楽しいなも
焼きいもやさんの一日
ハゲて悪いか
カラオケだって超過勤務にちがいない
インフルエンザはつりゃぁなも
寺久さんのささやかなわがまま
天白区植田南小学校
「負担にならない学校訪問」
長い話による人権侵害に抗議する
おすすめ所
愛知国体に反対する
台風が来たら休むがええ
家事はつらいなあ
民主的学芸会は笑える
一日おもしろ学校ごっこ
教員ペリーメイスン
座り込みの楽しさ
クラス替えはドキドキ
教員の組み替えはつりゃぁの
いいかげんでええがや
教員は本を読むか
花里さん、夜、徘徊する
限りなく「健常」な障害者プロレス
スポーツ商売
東大のシンポジウムはクソ不まじめだわ
望ましい〃いじめ〃対処の法
道徳の読本の不道徳
いかん先生と親
裁判はサウダーデ
忙しい教育業界
若い女先生来たる
いじめ撲滅は反対！①
いじめ撲滅は反対！②
わしの「学校の怪談」
トマトに沈黙
運動会は嫌いだぁー
九九で睡眠学習？
ガキもテレビ出演する
胃に穴があく
公園の死体騒動

第二部　ボクの学校攻防戦

第一章　『学校の七不思議』
第二章　楽な授業するための裏技
第三章　職員室の研修・修業・作法

おわりに

海外学会通信

北米スポーツ社会学会(NASSS)第17回大会

清野正義（立命館大学）

1996年４月～９月、Edinburghで研究生活をしていたとき、私はHeriot-Watt大学のスポーツ社会学者、John　Horneさんと会うことが多く、特に日本のスポーツ事情について語り合った。彼とは山下高行さんを介して研究交流を続けていて、共著『スポーツ・レジャー社会学』(道和書院、1996年)を出版している。NASSS第17回大会で彼が Robert Pitter (University of Memphis)に協力して組織した研究部会「Anthony Giddens, Structuration, and the Sociology of Sport」に参加しないかと誘われ、この大会がアメリカの市民権運動40周年を記念して、その発祥の地、Birmingham (Alabama) 市で開かれることになった、「Civil Rights /Human Rights: International of Differences」を統一テーマにしているというので、私は参加を決意したのである。

USAは私にとってはじめて訪れる国。オリンピック大会後のアメリカ南部を歩いてみたいと願っていた。しかしながら、いろんな事情が重なり、ただバーミンガム市に行き、会場のSheraton Civic Center Hotel に４泊し、大阪とバーミンガムをただ往復したにすぎない。ホテルを出たのは、大会参加者たちとBirmingham Civil Rights Institute を見学したときと、昼食後に散歩して、Birmingham Museum of Art を見たときだけ。街路樹の落ち葉が散乱し、歩く人の姿はなく、何かわびしい。魅力に乏しい都市という印象である。

最近のNASSSと第17回大会の構成については、既に野川春夫氏が、会報第15号（24～25ページ）に書いている。そこで私は、一参加者としての印象を述べたい。私の部会は最終日（11月16日）の最終時間帯（15：30～17：15）に位置していた。この時間帯のプログラムをここで引用したい。

3:30p.m. to 5:15p.m. Concurrent Sessions

Session 1: Graduate Student Research in Progress (Ⅳ)

Session Organizer and Presider: David Furst (San Jose State University)

Michael Letters (Queen's University) The IOC and the Environment: The Affinity of a Transnational Sports Organization for a Global Social Movement.

Rebecca Susan Kraus (Catholic University of America) The Effect of Sport Quality of Life: The Measurement Issues

Dutchess R. Jones (University of Tennessee) Perceived Quality of Life of Former African-American Female Athletes.

Session 2: Sport and Urban Issues

Session Organizer: Kimberly S. Schimmel (Kent State University)

Presider: Kathleen M.Kinkema(Pfeiffer College)

Susan G. Zieff (San Francisco State University) Playing Urban Sport; or, Becoming More or Less

American

Nancy E. Spencer and Cheryl L. Cole (University of Illinois) Creating a Space for Venus: Professional Sports and Economic Development in Cleveland.

Session 3: Theoretical and Methodological Issues in Sport Sociology

Session Organizer and Presider: Robert Sellers (University of Virginia)

Wilbert Leonard(Illinois State University), and John Phillips (University of the Pacific) An Overdue Statistical Correction in Sport Sociology

Alphonse Damas (University of Virginia) Structural Factor Analysis Experiments with Incomplete Data: The Case of the 1994 College Life Experiments of Black Student-Athletes Database

Ed Rosenberg (Appalachian State University) Race, Sport and Sexual Violence: A Review and Pilot Study Results

Session 4: Anthony Giddens, Structuration, and the Sociology of Sport

Session Organizer: Robert Pitter (University of Memphis)

Presider: Laura Cousens (University of Alberta)

John Horne (Heriot-Watt University) Structuration Theory and Sport and Leisure

Masayoshi Seino (Ritsumeikan University)The Rights and Agents of Sports Activities in Everyday Life

Robert Pitter (University of Memphis), and Laura Cousens (University of Alberta) Structuration, Institutional Environments and Professional Sports Leagues

Session 5: Postmodernism, Health, and the Body

Session Organizer and Presider: Mary E. Duquin(University of Pittsburgh)

Leslie D. Haravon(University of Iowa) Gaining Respect: Fat Women and Resistance

Mary E. Duquin (University of Pittsburgh) Leaming to Touch, Leaming to Heal: Health, Body and Massage

この大会の一つの特徴は、Session 1にある。院生たちの研究報告が多く、参加人数もかなり多く、そのため院生部会が設けられていた。彼らのための昼食会もあり、見学会も企画されて、networkingが意図されていた。これは学会の研究者養成的機能を意識してのことであろう。若い学会の若い研究者への熱い期待の現れである。第二の特徴は非白人研究者の、とりわけAfrican Americansの研究報告が目立っていた。しかし、私が見たかぎり、若手の研究報告も、African Americansのそれも、問題意識がそれほど鮮明ではなく、研究手法が一般に未熟であり、その意欲は空転していたように思う。この問題は土曜日午後（13:30～15:10）のSession 3においてとくに顕著であった。組織者のKeith Harrisonが頑張っていたが、その意気込みが報告者たちに正確に受容されているようには見えず、問題意識も、調査方法も、presentationも「水準に達している」とは言えない。

Session3: Intersections in Sport: African-Americans, Latino/as, and Samoan-Americans

Session Organizer and Presider: C. Keith Harrison (Washington State University)

Algerian Hart (Washington State University), and Russell Clark (Georgia State University), African-American Athletic Directors at Historically Black Colleges and Predominantly White Institutions: Different Lenses

C. Keith Harrison (Washington State University) Samoan-American Male Student-Athletes Today and Yesterday: Any Intersections with African-American Male Student-Athletes?

Roundtable Presiders: C. Keith Harrison (Washington State University) and Patiste Gilmore (University of Utah) Nomo and Rodriguez: Will Asian-Americans and Latinos Mirror the Trailblazed Path of African-Americans in Sport?

第三の、しかしもっとも目立つ特徴は女性研究者たちの動きである。NASSSの役職者、部会組織者、指導的発言者のなかで、女性が目立っていた。彼女たちは堂々としており、説得力がある。Janet Harris (University of North Carolina) はとくにそうであった。彼女は第1日午前（10:15～12:00）のSession 4「Sports Fans and Spectators (1)」の組織者であり、いつも若い研究者たちのなかにいて、どの部会でも目立つ存在であった。女性らしい気配りの才能がある。

ところで私の部会の参加者は J. Horne のときわずか7人、私の時には4人であった。 Robert Pitter は現われず、2つの報告がキャンセルされていた。わざわざ、京都とEdinburgh から出かけたのに、なんたることか。全く悲しい。しかし、それでも、前日(11月15日）、「Sport and National Identity」ですぐれた研究報告「Sport, Nationalism, and Ideas about Scotland」をした、Grant Jarvie (Heriot-Watt University) は最後まで残ってくれ、親切にも質問してくれた。この日の昼食のレストランで、1人で食事していた私を自分のテーブルに呼んでくれ、そこにいた若い研究者たちを紹介してくれた、イギリス紳士(Eric Dunning)の振舞にも感激した。その感激は目の前にいた柔道選手にして、日本柔道史の研究者と親しくなりえたことにより幾重にも倍加したのであった。

会員の動静

〈新入会員〉

若林　弘紀（筑波大学大学院）

高峰　修（中京大学大学院）

永松　昌樹（大阪教育大学）

野上　真（岡山大学大学院）

早川　武彦（一橋大学）

山田　ゆかり

依田　充代（日本体育大学）

坂　なつ子（立命館大学大学院）

〈住所等の変更・訂正・追加〉

＜退会者＞

土井　隆義、名古屋守利、広瀬亜由女

編集後記

「日本スポーツ社会学会大会/国際シンポジウム」の開催にあたって、一部会員の皆様に混乱が生じているようです。学会大会事務局と学会事務局とは別の組織です。学会大会の参加費、抄録の原稿等は、立命館大学の山下先生宛送付していただくようお願い申しあげます。また、学会年度会費が一部、学会大会事務局宛振り込まれているようです。お間違えのないよう再度、会報の第15号と本号をご熟読下さい。また、ついでながら申し述べておきますと、学会大会参加費と学会年度会費とは別物です。３月の学会大会におきましては、受付にて学会事務局員が新年度分も含めて年度会費を徴収いたします。ご理解の上ご協力下さい。

さて、事務局庶務担当の山本は、２月より在外研究員として海外に出かけます。在外研究期間中の事務局へのご相談、お問い合わせには、下記の電話・ファックスをご利用下さい。E-mailによるお問い合わせ等には、答えられない可能性があります。

(Yamanori)

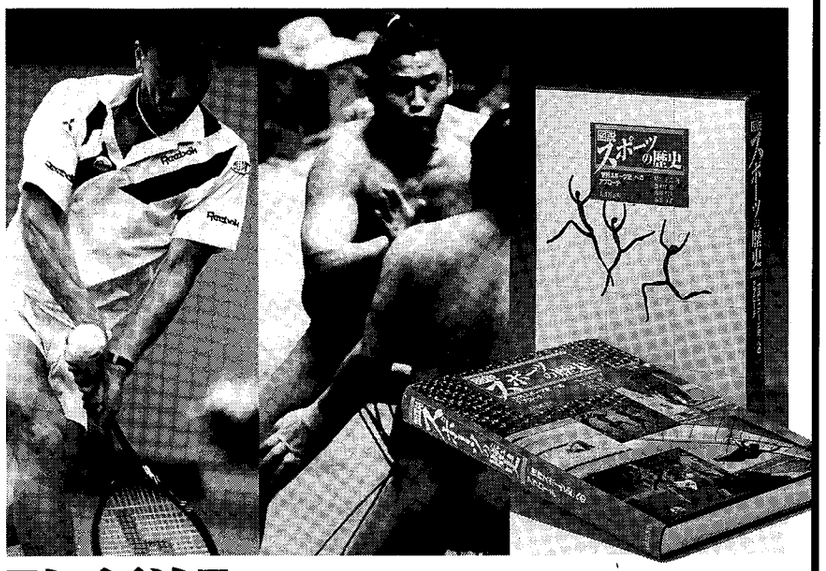
日本スポーツ社会学会会報　第16号

発行：日本スポーツ社会学会事務局

〒816　福岡県春日市春日公園６丁目１番地
九州大学健康科学センター内
Tel/Fax :092-583-7847(西村)
092-583-7856(吉田)

郵便振替口座番号：00390-0-43962
加入者名：日本スポーツ社会学会事務局

スポーツの過去・現在・未来を写真で語る



【図説】オールカラー

スポーツの歴史

《世界スポーツ史》へのアプローチ

稲垣正浩・野々宮徹・寒川恒夫・谷釜了正[著]／フォート・キシモト[写真]

人間にとってスポーツとは何か
歴史的視点からその本質を問う

世界が動き、スポーツも動く。いま、なにもかもが大きく変化する時代。すなわち「後近代」の始まりである。この「後近代」の視座から民族スポーツと近代スポーツとを対比し、スポーツの「現在」と「世界性」を問う。スポーツとは何か、長い歴史的スパンからの提言。歴史的に貴重な珍しい写真、迫力ある現代スポーツの写真約700余枚によって構成された大型美麗本。

B4変型判・上製・函入・264頁
４色刷り
定価18,540円

[主な目次]
序章＝スポーツの編年史／第１章＝大航海時代とそれ以降の民族スポーツ／第２章＝近化スポーツの系譜／第３章＝スポーツの現在／終章＝スポーツ文化の問題状況

大修館書店

【書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください】▶Tel.03-5999-5434

メンタルトレーニングにおけるイメージ技法の展開を豊富な事例に基づき検討

イメージがみえる ―スポーツ選手のメンタルトレーニング―

中込四郎・土屋裕睦・高橋幸治・高野聰 編著

1996年9月20日　A 5 判約　220頁　定価 税込 2300円

――スポーツ選手のメンタルトレーニングにおいて、著者らが求めてきた「イメージがみえる」状態とは、選手個々の競技への関わり方を変えるものでる。それは想起されるイメージの鮮明さだけで達成されるわけではなく、相当の時間とエネルギーが必要となる。本書で展開されるようなイメージトレーニングの工夫と積み重ねは、選手の日々の技術・体力トレーニングを刺激していくはずである。

筑波大学スポーツクリニック・メンタル部門が主催するメンタルトレーニング講習会の成果を元に編集。スポーツ選手、コーチ、カウンセラー必携の書！

≪主な内容≫

第１章　イメージをみるために
第２章　イメージがみえるまで　―基礎編―
第３章　イメージがみえるまで　―応用編―
第４章　イメージが変わると
第５章　イメージトレーニングの実践例
補　遺　スポーツカウンセリングルームから
　　メンタルトレーニング関連用語の解説

メンタルトレーニングの知的理解から体験的理解へ

メンタルトレーニングワークブック

中込四郎・土屋裕睦・高橋幸治・高野　聰　編　著

Ｂ５判　207頁　定価 税込　2300円

道和書院　〒171 東京都豊島区高松 2―8―6　ＴＥＬ (03)3955―5175　ＦＡＸ (03)3955―5102